

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	365日すぐやる必ずやるできるまでやるを念頭に置き、入居者様に良いと思うことはすぐに実践している。	社員手帳に記載されている7項目からなる経営理念を毎朝の朝礼で唱和し周知と実践に繋げている。また、ホームの独自スローガンについてはホーム内の目に付き易い所に掲示し共有に努めている。家族に対しては利用契約時に理念に沿った支援について説明している。職員は「すぐやる、できるまでやる」という想いを共有し、利用者の日々の状況の報告と連絡、相談をし合いながらより良い支援に繋げている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	以前は出来ていた交流の場が感染症交流からなくなってしまった。地域のお店などへは出向き買い物をしている。	開設以来町会費を納め地域の一員として活動してきたが、新型コロナ禍で殆どの地域行事が取りやめとなり残念な状況が続いてきた。そうした中、昨年の夏、地元岡田神社の「花火大会」が4年ぶりに再開されたことからホームとしても賛助金を奉納し利用者も共に大輪の花火を楽しんだという。また高校生の職場体験も再開され5名の生徒の4日間の来訪があり、ホームの畑の野菜づくりや花壇に花を植えたりして利用者と交流のひとつ時を過ごしたという。更に地域の民生委員主催の「みのり会」も再開され、地域のお年寄り30名ほどと共に体操やレクリエーション等も楽しんでいる。合わせてボランティアの来訪も再開され、新型コロナ感染対策として距離を置き交流の場を持ったという。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	感染症の流行から交流の場がなくなってしまったため課題ではあるが、高校生の実習の受け入れは行っており、認知症の理解の学びの場を提供している。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症の流行からすべて書面での開催となり、地域の方との交流がなく、意見交換が出ていないが、新聞は毎月発信している。	コロナ禍が続く中3月まで書面での開催が続いていたが、5月8日以降の感染対策の緩和を受け5月度より対面での会議が再開され家族代表、町会長、副町会長、民生委員、地域包括支援センター職員、薬局職員、ホーム関係者の出席で開催し、利用状況や運営方針、活動状況や事故、健康管理等を報告し、意見交換等も行われサービスの向上に繋げている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	現在はほとんどSNS(PCメール)にて連絡交換を行っている。	現状コロナの感染対策上ほとんどは「メール」での報告・連絡・相談となっているが、当ホームは市指定の施設として登録されていることから問い合わせ等で連携を取っている。また、市主催の「苦情処理、身体拘束」の研修会にはリモートで参加している。地域包括支援センター職員は運営推進会議の参加メンバーでもあり様々な意見交換等で関係を持っている。そうした中、介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し職員が対応して行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1度の研修を行っている。現在対象者はいないが、感染症流行から面会禁止となり、玄関は施錠せざるを得ない状況となった。	法人の方針として拘束のない支援に取り組んでいる。玄関は安全確保のため施錠している。外出傾向の強い利用者が若干名いるが家族と月に何回か外出したり、毎日、ホームの畑の水遣りをしたりしている。転倒危惧のある方が数名おり、家族と相談の上センサーマットを使用している。そうした中、月1回の身体拘束適正化委員会と3ヶ月に1回開かれる身体拘束研修会で拘束に対する意識を高め支援に当たっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	3ヶ月に1度の研修を行っている、職員へアンケートを実施、日頃から意識付けを行い防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年に数回の研修は職員向けに行っているが、感染症の流行から外部での研修が減っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居前に時間を作っていただき、契約説明し、問題点や疑問点などをお聞きしご理解いただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	現在感染症の流行から家族会ができなくなり、面会のための顔合わせとなっている。	新型コロナ禍が続き家族の面会がリモートで行ってきたが感染対策緩和を受け、現在はコロナワクチン3回以上接種済みを目安としマスク着用で3名まで、15分以内の対面面会を玄関もしくは地域交流室を利用しての面会を再開していることから、面会に訪れる家族が多くなってきているという。コロナ前には半年に1回家族会を開き楽しい時間を共に過ごしていたが3年間途絶えてしまっていることからコロナ前のように家族会を開き、夏祭りや手打ちそば等を楽しみたいという意向を持っている。そうした中、利用者のホームでの生活の様子は毎月発行されるお便り「岡田松岡便り」でお知らせし、利用者一人ひとりの様子は担当職員より手書きの手紙に写真を添え届け家族より喜ばれている。合わせてパソコンのインスタグラムでホームの様子を動画配信し、子供さんやお孫さんより好評を得ている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員一人一人面談を行い、意見を聞く機会を設けている、また週1日、時間を設け意見交換を行っている。	月1回全体会議を行い本社からの連絡事項、各種勉強会、意見交換等を行い業務内容の向上に繋げている。また、週1回ミーティングを行い1週間の出来事を確認し合い意思統一を図っている。人事考課制度があり、年2回期首に立てた目標に沿って自己評価を行い、管理者による個人面談も行われ職員一人ひとりのモラルアップに繋げている。更に年2回本社よりのアンケートを用いストレスチェックが行われ職員のメンタルヘルスにも取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に2回の人事考課を設けている。日頃の働き方など評価を行い賞与へ繁栄している。また、環境整備を通じて心を磨き手当に繁栄している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人職員からレベルを設定し研修を設けている。それぞれのレベルに合わせた研修となっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	運営推進会議を通じて交流をしていたが、感染症の流行から機会がなくなってしまったが書面にて新聞の交換を行っている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	それぞれの職員が声かけを行い、困っていることや不安を察知している。また不安があればすぐに対応できるよう心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時にご家族様へ要望を伺い、できる限り実践できるよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	環境の変化にとっても弱いため、不安を与えることがないよう、刺激のある生活に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除や料理など職員と一緒にを行うよう心がけている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現在面会は窓越しとなっているが、必ずお顔を合わせて頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	課題である、感染症の流行から入居後交流ができていない。	新型コロナ禍の状況下、家族以外の面会は自粛している。携帯電話を持つ利用者がおり家族と連絡を取り合っている。感染対策緩和を受け買い物が再開され、少人数に分かれ近くの馴染みのパン屋、スーパー、薬局等に買い物に出掛けている。また、年末には手作り年賀状を作成し家族等に出し喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	性格を把握し、席替えを工夫している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後のご家族様からボランティアを依頼があったが、感染症の流行から実施ができなくなってしまった。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お話する時間を作り、以前の暮らし方や本人の思いを聞き取り、変わらない生活ができるよう支援に努めている。	意思疎通は出来るが口頭で思いを伝えることが難しい利用者が半数ほどとなっている。そうした中、行動や表情から問い掛ける中で今何をやりたいのかを探り思いを受け止めるようにしている。また遠慮がちな利用者に対しては丁寧に接することを心掛け、意向に沿えるようにしている。トイレ介助や入浴中、また一緒に作業する中で聞いた情報等はタブレット端末の介護記録に残し出勤時に確認し業務に入るよう徹底している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居の際、ご家族へ馴染みの暮らしについて伺っている、センサー方式B-3を使用している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の体調管理に努めている。また日々の暮らしの場で一人一人何ができるかを把握するよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の暮らしの場で課題をみつけ、週1回朝礼にて課題分析を行っている。職員の意見を聴き介護計画へ繋ぎ込んでいる。	職員は1～2名の利用者を担当し、居室管理、足りない物の補充、個人別お便りの作成、家族対応、利用者一人ひとりの日々の状況把握等を行っている。入居時は家族から聞いた情報を基にカンファレンスを開き、3ヶ月間様子を見て本プラン作成に繋げている。家族の希望を加味しながら毎週行われるミーティングでモニタリングを行い、基本的には6ヶ月でプラン見直しを行っている。そうした中、状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い一人ひとりに合った支援に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の気づきや変化などを記録し、職員間で申し送りを行い共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	アセスメントの段階から本人、ご家族の希望を聞いた上でプランを作成している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町会の地域活動へ以前は参加していたが、現在は感染症の流行から参加できていない。お店に行き買い物をし楽しみ持てる生活が後れるよう支援しています。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	担当医へ入居者一人一人の状態を伝えており、急な状況にも適切な対応、アドバイスをしている、また薬剤師とも連携を図っている。	利用契約時に医療機関についての意向を聞き、ホームとしての取り組みを説明している。現在、4分の3強の利用者がホーム協力医の月1回の往診で対応している。他の数名の方は入居前からのかかりつけ医の往診を月1回受けている。常日頃から協力医とはきめ細かな連携を取っているが、7月より常駐看護師が1名勤務することになり日々の健康管理と合わせ、医師との連携を図る予定である。また、薬剤師が運営推進会議のメンバーでもあり、薬の管理や服薬についての的確なアドバイスも頂いている。歯科については必要に応じ協力歯科への受診で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在看護師は雇用していないが、かかりつけ医の看護師と連携しSNS等で相談を行っている。また訪問看護を検討中		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院の連携室と密に連絡を取り、情報交換や相談に努めている。また月に数回病院へ出向き関係づくりを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今後の課題である。当ホームには現在看護師がおらず不安があります、また住環境の工夫などが必要。	重度化や終末期に対する指針があり、利用契約時に説明し同意書を頂いている。食事や入浴することが難しい状況となり終末期を迎えた時には家族、医師、ホーム職員で話し合いの場を設け家族の希望を大切に医師からの指示も頂き、改めて看取り同意書にサインを頂き看取り支援に移行している。1年以内に3名の看取りを行い、新型コロナ禍ではあったが家族には居室にて最期の時を共にしていただき感謝の言葉を頂いている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	三カ月に1回の研修を実施、実践力を身に付けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	協力体制については課題だが、年2回の災害、避難訓練は実施している。	消防署へ届け出の上、年2回防災訓練を実施している。3月には台所よりの出火を想定した避難訓練を行い、初期消火、駐車場へ移動しての避難訓練などを行っている。合わせて通報訓練も行い、夜間想定では2名の職員で何が出来るのかを確認している。ホームのある地域はハザードマップ上では水害の指定地域であり、5月には水害を想定し「床下浸水」や「床上浸水」した避難訓練を行い、片方のAユニットから床の高いBユニットへ移動しての避難訓練も行い防災意識の向上に努めている。備蓄として水、食料、介護用品等が3日間以上備えられている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	トイレ誘導時には耳元で呼びかけている。黒手帳に沿った声かけを行っている。	アットホームな雰囲気を大切に基本的には敬語を使うようにしているが、「方言」や「和らいだ」言葉も交えながら親しみやすい話掛けに心掛けている。トイレ誘導の際の声掛けには特に気配りをし、周りにわからないように耳元で優しくお誘いすることを徹底している。呼び掛けは苗字に「さん」付けでお呼びし、居室への入室の際にはノック3回、トイレは2回するようにしている。また、年1回、接遇、人権擁護の研修会を行い、プライバシーに配慮した支援に徹している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	お茶の時間に好きな飲み物を選んで頂いたり、おやつなど数ある中から選べるよう提供している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者様一人ひとりの体調や気分を把握しその日どのように過ごしたいか本人の希望に沿った支援を心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個性を大切に、本人の好む服装、身だしなみ、おしゃれができるよう支援している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	日々の状態に合わせて、食べやすい形態などにしている、食器も持ちやすさなど工夫。食事の下準備や片付けなど職員と一緒にやっている。	殆どの利用者は自力で摂取でき常食で対応している。コロナ禍前は職員と共に会話を楽しみながら食事を摂っていたが、現在はコロナ禍での対応を継続しており同席することが出来ない残念な状況となっている。献立と食材は季節感を加味したものが配食会社より毎日配達され職員が調理し提供している。元気な利用者を中心に下準備、盛り付け、後片付けまで楽しみながらお手伝いに参加していただいている。行事の際にはホットプレートで焼きそばを作ったり、再開されたおやつレクリエーションでは「おはぎ」「桜餅」等手作りの物を味わい楽しいひと時を過ごしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量は毎日記録している。食事が進まない時は声かけ、食材、料理の説明をして興味をもって頂けるよう工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食の口腔ケアを行っている、口臭が強い方へ歯磨き粉を特別にしている、また歯がない方へはガーゼを使用しケアしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	失禁の少ない時間帯は薄いパッドを使用している。時間を決めて定時トイレ誘導をし失禁減少に努めている。	排泄については自立で布パンツ使用の方が若干名、一部介助でリハビリパンツとバット使用の方が三分の二強、全介助でおむつ使用の方が数名という状況である。タブレット端末の排泄記録も参考に、10時、15時のおやつ前、食前、食後の定時誘導に合わせてトイレへ誘導し、また、一人ひとりの様子を見ながら随時誘い気持ち良く過ごしていただけるようにしている。排便については4日間ない場合は排便コントロールを行い、お茶、スポーツドリンク、紅茶等で1日1,500cc以上の水分摂取に取り組みスムーズな排泄に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分の促し、量の把握に努めている。調子が良い時は歩いて頂くよう心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの日々の状態を把握し、お誘いの言葉など工夫している。また季節にあったゆず湯やしょうぶ湯など取り入れている。	全利用者が何らかの介助を必要としており、若干名の利用者は全介助でシャワー浴となっている。基本的には週2回入浴を行っている。入浴拒否の方が三分の一弱いるが浴室に音楽を掛けたり、誘い方に工夫をして入浴していただけるようにしている。また入浴後には温かいお茶を飲むことが習慣になっており、楽しみにしている利用者もいる。更に「ゆず湯」「菖蒲湯」「リンゴ湯」等季節のお風呂も楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は体操など心がけている、寝具など自宅で使っていた使い慣れたものを使用し気持ちよく眠れる環境を作っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者様の体調変化に伴い、主治医と相談しながら少しずつ減らしていくよう努めている、また薬剤師とも連携している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者様、ご家族様の要望を伺い、できる範囲で嗜好品を提供している。ヨーグルトなど。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	毎月の担当を決め外出レクを計画、散歩など本人の希望に沿ったケアを行っている。感染症の流行からご家族や地域の方と交流が減り課題である。	外出時は安全を考え殆どの利用者が車いす使用という状況である。天気の良い日にはホーム近隣の畑の周辺を30分ほど散歩したり、駐車場に出て長椅子に座り季節の花を見たりお茶を飲みながら外気浴を楽しんでいる。新型コロナの感染対策緩和を受け買い物が再開され、地元のスーパーやパン屋に少人数に分かれ買い物に出掛けている。また、正月には近くの護国神社に初詣に出掛け、更に季節に合わせ松本城や城山公園までドライブを兼ね出掛け花や紅葉を見たりしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者様の希望を尊重し、お財布を持参されている方は金額を決めて所持していただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族様からのお手紙やハガキなどご本人へお渡ししている、電話は携帯持参している方は自由に他の方は希望に応じてお電話している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花やオーブメントなどで心地よい刺激を受け取れるよう工夫。大きめのトイレのマーク、バリアフリーの床など安心安全への配慮を大切にしている。	両ユニットのリビングは陽当たりも良くゆったりとした広さがあり、利用者は一日の大半を過ごしている。庭には家庭菜園用の畑があり夏野菜の栽培や季節の花が作られている。壁には季節の飾り付けや利用者のぬりえ等の作品が貼られている。また、廊下の所々には観葉植物や長椅子、大きめのソファが置かれ寛ぎのスペースとして利用されている。	

グループホーム岡田松岡

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	座席やテーブルの位置など、それぞれにとっており良い居場所を確保できるよう工夫しています。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際に使い慣れたものを持参していただくようお願いしている。本人が居心地よく過ごせるよう工夫している。	整理整頓が行き届いた居室には大きなクローゼットと洗面台が設置され暮らしやすい造りとなっている。持ち込み自由で、家族と相談の上、使い慣れた家具、衣装ケース、イス、テーブル、仏壇、テレビ等が置かれ、家族の写真や花、自分の作品等に囲まれ穏やかに生活していることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者様一人ひとりの残存機能を把握して、わかることを活かして提案し活動していただいている。		